薬師寺休ケ岡八幡宮の調査
－第496次

1　はじめに

休ケ岡八幡宮は薬師寺の南側に位置し、平安時代の寛平年間（889～897）に勧請され、中世には数次の罹災と再建が記録されている。現存する社殿は慶長元年（1596）の地震で倒壊した後、同８年（1603）に豊臣秀頼が造営したものである。延宝４年（1676）から享保末年頃（1730～1734）の間に描かれた「伽藍寺中之図」には、八幡宮の左右から回廊（座小屋・御廊）が取り付き、中門と楼門が描かれている（図219、奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観　薬師寺：全』、2000）。しかし、『西院堂方講日記』には、この社殿も宝永４年（1707）の地震で「八幡宮楼門石居五、八寸斗落入。御廊破損ス。御殿者無別条。」とあり、本殿は無事であったが楼門と座小屋が倒壊したことがわかる（『薬師寺報告』）。座小屋は倒壊を免れた部分で切りそろえられたため、南面と北面で長さが異なり、現在に至るとみられる。

2　調査の概要

本調査は休ケ岡八幡宮のトイレ浄化槽の設置にともなう。史跡指定地内にあたり、薬師寺からの受託事業として実施した。調査期間は2012年７月４日～７月６日、調査面積は東西２ｍ、南北3.3ｍの狭小なトレンチで、明確な遺構は検出されなかったが、周辺の調査成果とあわせて、成果をまとめておく。休ケ岡八幡宮に関わる調査は、1981年に第131-22次として南面座小屋と南門の推定位置を、2010年度に第475次として休ケ岡八幡宮の東側と北面座小屋の南側で調査をおこなっている。

本調査区は北面の座小屋の延長部分にあたるが、調査の結果、中近世の遺構面は残存しないことがわかった。楼門と南面の座小屋が想定される位置でおこなった調査（第131-22次）でも、休ケ岡八幡宮に関連する遺構は検出しておらず、地山面で奈良時代の遺構を検出している。

基本層序はGL-60cmまでがガラスやプラスチック製品を含む現代の盛土であり、その下で淡黄色粘質土を検出した。この上面で穴を２基検出したが、いずれも埋土にガラス片などを含む。淡黄色粘質土を10cmほど掘り下げたところで、非常に硬い淡青色のやや風化した岩盤らしき地山を検出した。

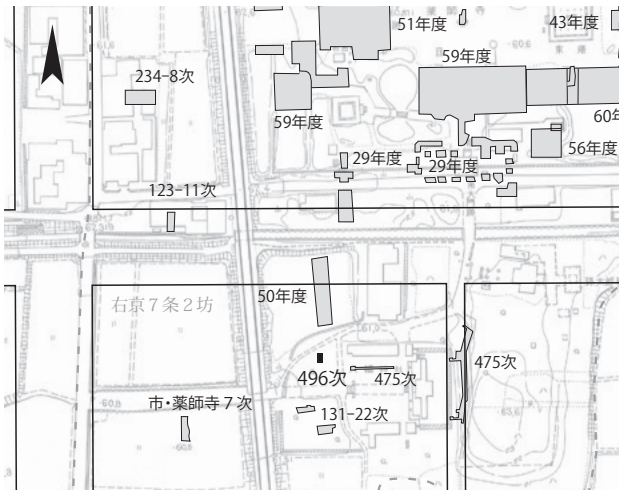

図218　第496次調査区位置図　1：2000

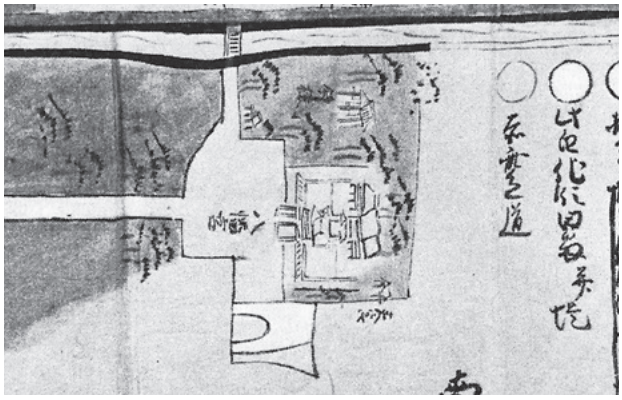

図219　「伽藍寺中之図」（部分）

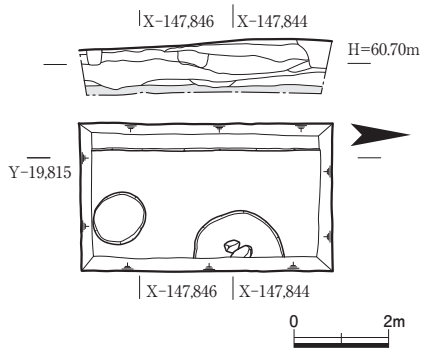

図220　第496次調査遺構図・西壁土層図　1：80

現存する座小屋の礎石上面のレベルは本調査区GL-10cm付近にあたることからみても、休ケ岡八幡宮に関連する遺構面は残存しないことがわかる。地山面は第475次調査から休ケ岡八幡宮を頂点に西に落ちる地形とみられ、地震による座小屋および門の倒壊は、中近世の盛土が地滑りを起こした可能性もあろう。

今回の調査所見では、①休ケ岡八幡宮がやや風化した淡青色の岩盤からなる地山に盛土して造営した可能性が高いこと、②宝永４年（1707）の地震で倒壊した西側部分については、中近世の盛土が流出した後で、昭和になって盛土されたことが判明した。　**（神野　恵）**